東京支部だより

第 3 号
編集・発行
諏訪清陵高等学校
同窓会東京支部
事務局
〒270-11
我孫子市白山2-15-2
林 尚孝 方
TEL 0471-83-2726

今年もまた「清陵神宮の集い」の季節がめぐって来た。当番幹事学年として59回生の諸兄には何度かお集まり願った。ともすれば、本題の支部総会の準備はそっちのけで、旧交を温める方が優先されがちであったが、瞬時にして童心に帰った面々の想い出話はつきることがなかった。

響け!!「東に高き……」

10月2日㈮ 日本青年館

小川 勝嗣（59回）

コンパの夜、校舎の裏手でリンゴを頂戴したまでは良かったが、リンゴ畑の隅の肥溜にはまって、洗えども洗えども臭気が抜けず一同を辟易させたとか、ボート部員を籠絡してボートを出させ、対岸に渡り夜の梨狩りと洒落こんだなど、お縄になりかねない所業は日常茶飯のこと、今にしてみれば絶句、噴飯ものであるけれども、当時はそれを大目に見てくれるおおらかさがあった。

心に潜み、懐かしむ清陵の原点は、そんなおおらかさの中で高校生活が送れたことにあるのかなと認識を新たにしたものである。

人とのつきあいを見ると、会社や仕事のつきあいはどちらかといえば理の世界であり、同窓会、それも若い時のものほど情のつながりが強い。俗にいう同じ釜の飯を食ったという仲は、掛け値なしにホンネそのもの裸のつきあいである。日頃、タテマエとホンネを使い分けるのに気を遣い、絶えず相手の本心は何か、と窺っているような毎日を過していると、素直でおおらかな世界に時々は戻って見る必要があるように思う。清陵同窓会がそんな原点復帰の場になってくれればと願う。

「ふるさとの山に向ひて言ふことなし、ふるさとの山はありがたきかな」と啄木は詠んだ。八ケ岳を眺める度に不思議にこの歌と清陵第一校歌が浮んで来る。都会で食いつめたら田舎に帰って百姓でもするかという時代ではないけれども、いつでも帰れる場所がある――たとえそれが想いの内だけであっても――という意識を持てることは素晴らしい。清陵同窓会も価値ある帰れる場所の一つであると云いたいのである。

59回生が三年生の時は創立六十周年であった。三年後の平成七年には百周年を迎えるという。当時の新校舎は影も形もなく、私共にすれば新々校舎が百年の伝統の栄誉を受けるべく聳えている。久し振りに歩いた母校の周辺は、かつての面影を残しながらも、時代と共に生徒も学校もまわりの社会も変化を遂げて行くあり様が感じられる。しかし清陵の良き伝統は確実に引き継がれていることが、校長先生はじめ同窓会諸兄姉のお言葉からも伺うことができて嬉しく誇りに思う。

どうか十月二日、支部総会に一人でも多く参加され、高らかに「東に高き……」を歌って欲しいと諸兄姉にお願いする。

一九九二年度

定期総会案内

一、日 時 十月二日（金）午後六時
一、場 所 東洋軒（日本青年館4階）
電話 〇三-三四七五-二二五二
（JR信濃町・千駄ケ谷駅、地下鉄外苑前駅下車）
一、議 事
(1) 一九九一年度会務・決算報告
(2) 一九九二年度事業報告
(3) その他
一、懇親会
一、会 費（七、〇〇〇円）
（当番幹事59回生 次期当番幹事60回生 サブ幹事69・79回生）
当日開会前五時半より、御柱祭記録ビデオを上映いたします。
ご面倒でも、出欠にかかわらず同封の返信葉書の記載事項を確認し、必要事項を記入して**九月二十日**までに到着するようご投函ください。

ご挨拶

〝千萬人と雖も吾往かん〟

東京支部長　小　平　祐

母校の持田校長先生が語ってくれた二つの話がある。

一つは、清陵三年生の上原三枝さんが、帯広の世界ジュニアスケート選手権大会で奮闘して帰った時のこと。校長室へ報告に来た彼女は、清陵の生徒は冷い。"SEIRYO JAPAN"のアナウンスと共にスタートラインに立った時、クラスメートの声援は伝わってこなかった。私のスケートへの努力は何だったのか。と泣いたという。

二つめは、先生自身が湖周マラソンに参加した時のこと。走り終って、ランナーに配られるリンゴを貰おうとした。ところが、係の生徒は、先生は走者名簿に登録手続をしてない、といって断ったという。

先生は、「諸君の千萬人と雖も吾往かんの気慨はいい。でも何かが欠落している。自ら反みて縮くんば の前提があるではないか」と訓されたらしい。

二つのお話を折重ねてみると、清陵の風土が浮んでくる。勉学第一で、理非が先、情感は後、ということか。生徒等は、上原選手や持田先生が身を以て示してくれたものを理解し得なかったようだ。

これらの話の底には、智と理を尊ぶ気質が流れている。寧ろその底流の方を大切にすべきだともいえよう。いずれにせよ、〝欠落部分を補塡しながら千萬人精神を進める〟のが我々清陵人の心構えというものだろうか。

上原選手の後日談を伺った。今年のアルベールビルオリンピックを終って、校長室へ来た彼女はすっかり逞しくなっていた。〝私のスケートは皆さんのお陰です。〟といって微笑んだという。リンゴを断った生徒もその後成長したか、後日談を聞きたいものである。

ふり返ってみると、私なども千萬人精神の欠落部分が大きくて、その修復に汗をかいてきたようだ。私にとって清陵同窓会は、その修復の過程を照らしてくれる格好の場であった。同窓会に出ると、私の諏中時代は五〇年を経て、今も続いているのだと実感する。楽しい場であると同時に、有難い機会でもある。

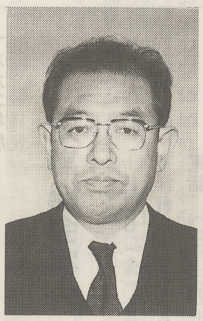
同窓会の捉え方は、人様々であろう。様々な捉え方が集合して、新しい昂揚が生れる。故郷を離れた東京支部の集いも意義深いものがあると思う。

今年も神宮の森にわが校歌がこだまする秋が近づいた。本部では創立一〇〇周年の計画が着々と進み、東京支部にも重い役割が与えられている。

どうか、多くの方々が支部総会に参加され、歓談の時を持って頂きたいと思う。

当日の盛会と、同窓会の発展を祈念する次第である。

終



―遅速の如き問う所にあらず―

学校長　持　田　明　夫

表記の言葉は、皆様ご存じのように昨年諏訪湖畔にその顕彰碑が建立された本校伝統の「湖周マラソン」創始者「山本喜市」先生の言葉であります。今年で79回をかぞえる一大伝統行事は、この言葉にささえられて来たのであります。重荷を負うてまされながら七百九十六位で無事ゴールいたしました。「走ること(歩く)は哲学することである。」千人を越える全校生徒と走り(歩き)ながら、何百人もの若者に迫い抜かれながら、常に若者の背を見つめながら、私の哲学した時間は二時間二十四分五秒八でありました。学友会より手渡された公式記録にそう認めてありました。

さて、その哲学の中味でありますが、申し上げるまでもなく生徒急減期を迎えての我が清陵高校の未来像であります。公教育における高校教育の空洞化はかねてより指摘されていました。そこで、本県高校教育も今大きく動こうとしております。単位制高校開設、体育科・理数科・英語科・音楽科等の新学科設置、入試制度改善の動きなどがそれであります。このような全県的動きのなかで、わが清陵の将来像をどう描くか―難坂道を登る人生行路にもあてはまる、本当に良い言葉であります。

本校着任以来、76・77の二回にわたり「岡谷」から中途参加していた私でありますが、昨年の78回は完走賞のリンゴにつられたこともあり全行程23キロに挑戦、多くの生徒に励

しいテーマでありますが、同窓諸兄姉の思いをしっかり踏まえ過ちなきよう舵とりしなければと、駄馬に鞭をいれ走る近頃なのであります。「牛正坂」の急坂をあえぎつつ「牛歩」のように登りゆく私の横を、生徒たちは実に清々しく軽やかに走りぬけていきます。今の清陵そして明日の清陵を背負う彼らは本当に逞しい。遅速にとらわれることなく地に足をしっかりつけて頑張って欲しい、走り去る背にむかい無言で心に呼びかける私でありました。

そこで、本年度の進学状況でありますが、現役国公立95、私立200、進学率五七・六%でありました。初の四百人学年でありますが、よく頑張ってくれたと喜んでおります。

一方武の道におきましては、小平支部長さんのお話にもある上原三枝先輩の「アルベールビル冬季五輪」出場・短艇部女子カジ付きフォア（三月全国選抜大会四位）・男子シングルスカル「インターハイ」出場などが特筆されますし、皆様関心おもちの野球部も今年は「打の清陵」を看板に甲子園めざし汗を流しております。（このたより発刊時にはもう結果はでていますが）

いずれにいたしましても、創立百年を目前にした皆様の母校「諏訪清陵」は伝統の重荷に負けることなく、文武両道なにごとにも手をぬくことなく頑張っております。今後とも温かいご声援を賜りますようお願い致しまして私のご挨拶といたします。

一九九二年度 本部定期総会報告

矢崎悦郎（59回）

四月から五月へと御柱で燃えた諏訪も、折からの梅雨入りということもあって、街は静けさを取戻し湖畔の人影もまばらだった。

六月二一日に二一四名の参加で平成四年度、同窓会定期総会が開かれた。会場は、例年と異なり、「諏訪シティホテル成田屋」。

当番幹事五九回生は毎月同年会を持つなど準備万端整え、定刻一時丁度開会、小菅副会長の開会のことば、鎮魂歌が流れる中で物故会員を偲んで黙禱、続いて石井同窓会長は挨拶の中で、総会及び各支部活動の盛り上がり、母校が文武両道にわたり好成績を収めていることにつき喜びを語り、来る平成七年に母校が創立一〇〇周年を迎えることに言及し、同窓生の今後一層の力添えをと述べた。

四回目の出席となる来賓の持田校長は、同窓会からの物心両面での支援に感謝すると共に、母校の近況を語った（詳細は学校長の寄稿文をお読みください）。

議事に入り、平成三年度会務報告・決算報告、平成四年度事業計画収支予算案が承認され、他に役員改選と一〇〇周年事業計画案など重要議案も全て承認された。

新役員は次の通り。（敬称略）

会　長　小菅重男（45回前副会長）
副会長　小平　祐（42回東京支部長）
〃　宮坂久臣（49回岡谷支部長）
監　事　井上彦次（42回・留任）
〃　小口成人（44回・新任）

石井前会長は顧問に就任した。

一〇〇周年記念事業計画は、

① 内向けの事業として、記念総会・祝賀会・施設等の整備・百年史発行・名簿発行等

② 外向けの事業として、文化講演会・音楽会・名画会・美術展等

③ その他、貴重資料散逸防止事業・ビデオ制作・記念旅行等を計画、以上それぞれについて、実行委員会組織・人事が予算と共に承認され、早速活動開始の運びとなった。

総会後の記念講演

総会後の記念講演は、当番学年の59回生三人のジャーナリストによるリレー講演が「今世界は……そして日本は……」と題して行われた。講演終了後は懇親会で久闊を叙し、校歌のあと散会した。

講演会の三人の発言要旨を記す。

朝日新聞論説副主幹高橋文利氏は「日本に民主主義は存在するのか」と問いかけた後、PKO問題・金融不祥事・日米交渉などを国内問題と絡めて論じ、多様性を持った思考の必要を説き、終わりに、地方が強くなり中央集権にブレーキをかけるべきだと訴えた。

次に立った共同通信社記事審査室主幹の玉木裕氏は、経済大国日本の国民が、必ずしも「世界一恵まれた生活」を享受しているわけではないとして、過労死・遠距離通勤・長時間労働・家庭崩壊などの例を挙げて、国民生活向上のための、選挙権の有効な行使と国民運動の必要を説いた。また、自身の海外生活体験をもとに、オーストラリア人の、人生を楽しむ生き方に学ぶべきだと語った。

締め括りは、NHK解説主幹の堀内敏宏氏で、冷戦構造の解消後、流動化する国際情勢について、次の三つの視点を強調した。

即ち、①民族紛争、価値観の分極化、不平等拡大など、現状の危うさの認識。②世界で唯一の軍事超大国となった米国への警戒と歯止めの必要性。③もっとアジアに目を向けた外交展開。――などなど、幾多の事例を挙げて問題意識を喚起した。

マスコミ界をリードする立場の三人が語る一言一句に、時局の重大さを感じ取った。

力強くグイグイ押してくるような高橋氏の論調、ユーモアを交えて会場を温かく包んだ玉木氏の話術、急激な変化が続く国際問題を、明快な切り口で語る堀内氏といった具合で、三者三様の個性的な語り口も興味深かった。

第二五回東京支部総会報告

田中得一（58回）

一九九一年六月末、58回生の約二〇名が、今年度東京支部総会の当番に当っての相談のために集合した。

当日、セレモニーとしてやることは概ねわかっているとはいうものの、所要時間も、そこへ独自のイベントが組込めるのかなども殆どわからない。今までに支部総会に出席した人から大凡のことをきくことから始めた。大体の様子がわかったところで、議論の挙句、ビデオを作って当日上映しようということになったが、誰が脚本を書き、撮影担当は誰、費用は？　など難問は尽きない。色々な意見が出たが、結局、宮坂健二君から、この夏、母校や同窓会の行事を中心に余り欲張らず、今年の同窓会本部総会の記録テープをもとに、このあとの学校行事などを出来るだけ録ってうまく編集すれば何とかなるのではないか、という提案があり、衆議一決した。とはいうものの、この後が大変だったが、詳細は長くなるので省く。

一〇月四日当日、石城浩吉君と河野瑳智子さんの司会で、寺島亮三当番幹事代表、小平東京支部長、石井本部会長、母校の守矢教頭らの挨拶、林事務局長の会報報告等も無事終了、懇親会になった。今回は特に、19回生の大先輩古山主一郎氏により、「第二校歌」の歌詞についての解説が行われた。九〇歳の御高齢にも拘わらずお元気なお姿は、参会者一同の感銘を呼んだ。

続いて58回生製作のビデオ「母校清陵そして同窓会　平成三年夏物語」が紹介され、機械のトラブルで多少時間を取ってしまったが、以後、歓談、校歌斉唱と恙なく進行、最後に次年度学年幹事代表59回生金子政喜君の挨拶があり、ほぼ予定時刻に全日程を終了した。ビデオは当日会場にて四〇本の予約の他、その後の分を含めて合計二〇〇本を上回るお申込みがあった。同窓生諸賢の御協力に感謝の意を表する次第である。なお残部多少あり、ご希望の向きは58回生寺島亮三君にお申込みいただきたい。

東京支部ゴルフ大会のお知らせ

第1回、平成二年一〇月二五日、参加者一五名。第2回、平成三年一二月四日、参加者二九名、と年々盛大になってくる東京支部ゴルフ大会を今年もまた秋に開催致します。

昨年〝支部だより〟にて、皆様にゴルファー登録のお誘いをした所、七〇名程の方々が申込んでこられました。しかしまだまだこの大会のことをご存知ない方が多いようです。

千葉セントラル・ゴルフクラブは千葉のゴルフ銀座ともいわれる近い所で、五井駅より車で二〇分程、パブリックですがコースはAクラス五四ホール、支配人は一〇〇人でも二〇〇人でもお引受け致しますといってくれ、その上プレー費も安くしてくれております。

今年こそは多勢の参加者を得て、名実共に諏訪清陵の親睦ゴルフ大会らしくしたいものと考えております。参考までに参加者のプロフィールをお知らせしますと、○35回生から74回生にまたがり、上

下の年齢幅が広く、プレー中の会話がひろがる。

○ベストグロスは八〇台が第一回一人第二回二名、九五から一二〇位の方が大部分で、一三〇を超える方もおられ、上手下手は関係なく、楽しくプレーが出来る。

○新ペリア方式でHCPを決め、コンピューターで直ちに成績を出して頂けるので、幹事の役割も楽で、結果にこだわらず楽しめる。

ゴルフ愛好者で未登録の方は、氏名、卒業年次、HCP、住所、電話FAX番号明記の上、下記宛てお申込み下さい。

〒一〇一 東京都千代田区三崎町二-一七-一

第二藤沢ビル 四〇三号

河合三彦公認会計士事務所

大会幹事 小松 誠（42回生）

河合三彦（66回生）

清陵高校（旧諏訪中）第二校歌について

古山主一郎（19回）

私は昨年の東京支部総会に約七十年ぶりで出席しました。その時の私の状態は「浦島太郎帰郷の場」といったものでした。もと学んだ校舎は消失し、旧知旧友はほとんどが故人となり、私一人が呆然と同窓諸氏の間に立ちつくして居るといった情景でした。しかし、玉手箱の中から現れたものは、昔の先生方や同級生の思い出話と校歌とでした。特に校歌は初対面の同窓諸氏との間にでも、忽ち一脈相通ずる親しみを持たせて呉れる尊い宝物でした。今浦島もこの校歌のある限り、皆さんと一体感を持って親しくおつき合い出来る幸せを感じました。

さて、この校歌についてですが、さきの東京総会で第二校歌の歌われ方とその楽譜とを拝聴拝見し、その昔の歌との違いにびっくりしました。いつの間にか二長調が二短調に変っており、「おお博浪汝もか」といったショックでした。もともとこの歌は、私としては近年になって初めて知った事ですが、本校先輩で一高在学中だった中島喜久平氏が作詩し、これに一高寮歌の一つ「暁寄する新潮の」の曲を編用したものが、諏中校歌に採用されたといういきさつがあります。私の諏中在学当時卒業生には多数の一高在学生乃至卒業生の方が居られ、学校の行事によくやって来られて一高寮歌を歌って呉れたものでした。自然私達もその中の数曲は歌えるようになりました。しかし、「暁寄する」はあまり歌われなかったので、この両歌の関係については一般には知られて居ないようです。

私がなぜこんなにもとの寮歌にこだわるかということについては次の理由があります。私が一高在学中だった大正七～十年頃歌われて居た寮歌が現在著しく違って歌われて居ることから、そもそも原曲はどう歌われて居たのか、何とかして原曲を永久に保存し、いたわってやれるような組織が欲しいと近年思うようになりました。そして微力ながらその方向に向かって声をかける努力をしております。この過程に於いて現第二校歌の曲の変化は一高寮歌の変化と大いに関係して居る所があると一応納得しているところであります。しかし歌は詞と曲とが一体となって初めて価値を発揮するもので、原歌作成当時と現在とが世情の変化により歌われ方が違って来たとしても、歴史としての詞と曲との一体化は保存尊重さるべきものだと信じます。そしてこれがまた私に残された大きな希望なのであります。

最後に私が全くの音楽素人であるのを押していろいろ申し上げたのに対し、東京支部役員各位並びに音楽専門家を含む校歌収録委員会委員各位が我慢強く御聴取下された事に対し、満腔の謝意を表すると共に、今後も尚私の意のある所をお酌みとり下さって、永遠の愛唱に耐える曲への発展と共に、歴史ある原曲の保存確立にも一層の御配慮を賜わりますよう念願いたします。

会務報告

一九九一年

一〇・四 第二十五回東京支部総会。午後六時から日本青年館四階東洋軒にて開催。出席者一九〇名。

型通りの支部長挨拶、会務報告、来賓挨拶に引続き懇親会が行われ、58回生の制作したビデオ〝母校清陵そして同窓会―平成三年夏物語―〟が上映された。19回生古山主一郎氏と当番学年から第二校歌に関する解説パンフ二種類が配布され、思い出に残る総会となった。

（当番幹事58回生・次期当番幹事59回生 サブ幹事68・69回生）

一一・二一 百周年記念事業ビデオ制作第一回打合会 岩波映画会議室にて打合せ。出席者四名。

一一・二四 44回生大塚春彦幹事告別式に支部長他参列。中野宝仙寺。

一二・四 第二回東京支部ゴルフ大会が千葉セントラルで開催され、

二九名が参加した。

一九九二年

一・一四　百周年記念事業ビデオ制作第二回打合会　岩波映画にて制作方針を打合せ。制作委員会委員長に小口禎三氏を委嘱。出席四名。

二・二二　同窓会本部常任幹事会・幹事会・懇親会が清陵会館で開催され、東京支部から三名が出席。

二・二七　第二回名簿製作WG会議　中央印刷にて七名で打合せ。

三・二七　百周年記念ビデオ制作準備委員会　日本青年館にて開かれ打合せを行う。出席者一四名。

五・三　名簿製作のためのデータ確認往復葉書三六〇〇通投函。その後督促の葉書投函。経費五三万円。

五・七　支部だより第三号編集委員会　午後六時より岩波書店にて編集打合せ。出席者六名。

五・二三　本部常任幹事会・幹事会・懇親会　清陵会館にて開催され、総会および百周年記念事業などについて審議。東京支部から四名出席。

五・二五　常任幹事会　午後六時から飯田橋会館にて開催し、二六回支部総会、名簿作成、ビデオ制作などについて打合せ。出席者一七名。

六・三　南信同窓連定期総会が新宿レストランパブラコンテにて開催され、清陵から一名出席。

六・二一　本部定期総会　午後一時から成田屋ホテルにて開催され、新会長に小菅重男氏を選出。記念リレー講演「今世界は……、そして日本は……」が59回生高橋文利、玉木裕、堀内敏宏の各氏により行われた後、懇親会が開かれた。出席者約二百名。

六・二五　幹事会　日本青年館にて開催され、二六回支部総会、名簿作成、百周年記念ビデオ制作などについて審議した。出席者四七名。

七・一八　長野県同窓連定期総会および懇親会　午後一時から健保会館にて開かれた。清陵から三名出席。

東京支部会員名簿へのご協力に感謝！

東京支部として十年ぶりに会員名簿を九月に発行する予定で作業を進めています。東京支部のデータベースは一昨年完成し、その後活用されていますが、基本となったデータが古くその信頼性については問題がありました。

そのためこの五月支部会員全員に往復葉書によるデータの確認を行いました。三六〇〇通弱の投函に対して、何と八一%強の驚異的ともいえる返答が寄せられました。内訳は次のとおりですが、購入希望者も予想を上回る数です。

購入	一九〇二通
不購入	八二〇通
不記入	一〇四通
死亡	三六通
不着	八三通

この他、本部関係者二五名が購入を申込んでおり、当初の印刷予定二千部では足りないことが明らかになり、一割増刷する予定です。名簿購入を希望される方は早めに事務局宛お申込みください。品切れの節は悪しからずお許しください。

データ確認へのご協力を頂いた会員の皆様に改めて感謝申し上げます。

（七月一一日現在）

新会計年度（一九九二～一九九六年度）の会費徴収について

一、過年度会費の取扱いについて

(1)　一九八七年四月一日～一九九二年三月三一日の会計期は、本年三月三一日で終了しました。

(2)　一九九二年四月以前の未納者への会費の請求事務は行いませんが、未納の方は払込みをお願いします。

二、本会計期（一九九二年四月～一九九七年三月）の会費徴収について

(1)　年会費六〇〇円とし、従来通り五年分三、〇〇〇円をまとめて徴収します。

(2)　会費免除措置の新設

75歳以上の会員の会費を免除し、以下の措置を取ります。

①　36回生以前の同窓会員は、会費免除とし、請求しません。

②　37回生には、五年間の会費として六〇〇円を納入していただきます。以下、38回生は一、二〇〇円、39回生は一、八〇〇円、40回生は二、四〇〇円、41回生以降は三、〇〇〇円をそれぞれ納入していただきます。

(3)　終身会員制度の新設

一万円の一括納入により終身会員といたします。

(注)　一九九七年以降については終身会費の見直しあるいは終身会員制度の廃止もありえます。

ただし、今期の終身会員は将来にわたり会費納入の義務はありません。

平成3年度収支決算報告（案）

自平成3年4月1日　至平成4年3月31日（単位：円）

収入の部 項目	金額	支出の部 項目	金額
総会費	1,302,000	総会費用	1,170,438
会員年会費	912,585	会議費	303,624
寄附金	50,000	諸会費	20,000
受取利息	548,985	旅費・通信費	630,632
幹事会費	47,000	印刷費	106,090
前期繰越	11,209,653	事務雑費	254,164
		支部だより費	140,531
		次期繰越	11,444,744
計	14,070,223	計	14,070,223

「釣りバカ日誌」秘話

武居俊樹（63回）

小学館へ入社して25年余、まんがの編集に携ってきた。

僕の大学時代（早大文学部・演劇専修）の友人に、山崎充朗という奴がいた。山崎は、九州は宮崎県都城市出身。彼に会って驚いた。とにかく、変なのだ。いつ会っても、くだらない駄洒落と冗談。人類に、こんな奴がいるなんて信じられない。

信州で生まれ、信州からほとんど出たことのなかった人間が、初めて、非信州人と出会った時のショックだった。

だが、僕は、九州人のイカレポンチぶりに、どんどん染まっていった。もしかすると、僕の中に〝南方〟の血が半分位まざっていたのかもしれない。

山崎は東映の助監督になり、僕は編集者になった。大学を出て、6年後、山崎に会い、いろいろな経緯があったのだが、とにかく、僕は、彼をまんがの仕事に引きこんだ。

小学館発行の「ビッグコミック・オリジナル」というコミック誌がある。

山崎は、その「オリジナル」で、〝やまさき十三〟というペンネームで、「釣りバカ日誌」という作品の原作を書いている。

ある日、やまさきから電話があった。まんがの主人公伝助の会社社長鈴（スー）さんと、義父を諏訪中学出身にしたい、というのだ。

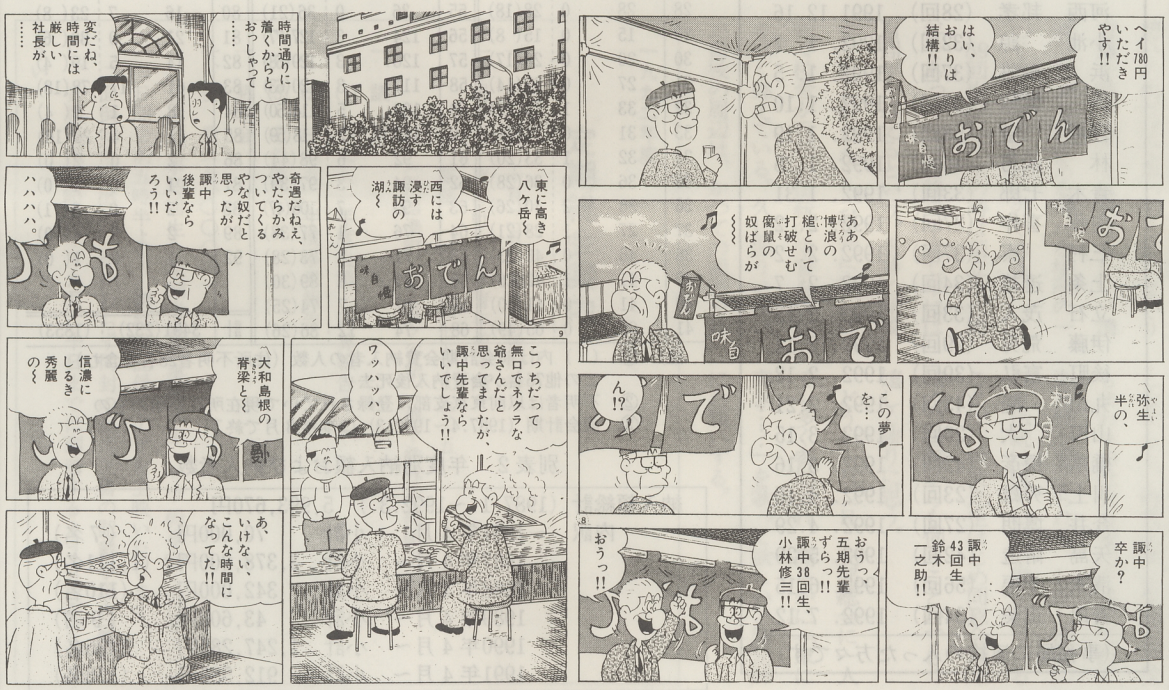
鈴（スー）さんと義父は、ガンコで意固地、融通がきかない、まさに信州人だというのだ。

僕は、受話器を握ったまま、暫く無言だった。わかった。山崎は、僕を信州人の代表として、そういう風に見ていたのだ。

というようなわけで、オリジナル誌上に、〈東に高き～とか、〈ああ博浪の～とか、が登場したのだ。

「釣りバカ日誌」は、現在コミックスで31巻発行されている。〈東に高き～のくだりが読みたい方は、11月末発売の32巻に収録されますから、お買い求め下さい。定価は五〇〇円です。

同窓生諸氏の中には、今年の春頃から、小学館発行の「ビッグコミック・オリジナル」誌連載中のマンガに、登場人物が母校の校歌を歌うところが度々あって驚かれた方が少なくないときく。これは如何なることかと取材したところ、63回生の武居俊樹氏（小学館第一編集部勤務）が原作者と親しい友人であることが判明した。そこで超多忙の武居氏にお願いして、そのあたりの経緯を一文にして寄せていただいた。当のマンガの齣とともに、とくと御覧あれ。（悦）



東京支部の現況

データベースから東京支部の現勢を見ると次のとおり。

一、同窓会東京支部会員の定義

(1) 首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城)在住の同窓生(ただし、退会申入れ者を除く)。

(2) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢：総数三、四八九名(住所不明者二四三名を除く)

(1) 都県別会員数

内訳　東京都＝一、八八三名　神奈川県＝六六八名　埼玉県＝三七三名　千葉県＝四一九名　茨城県＝五〇名　群馬県＝二四名　栃木県＝二六名　その他＝四六名

(2) 年次別会員数(別表1)

三、会費納入状況(一九八七・四～一九九二・三会計期)

(1) 納入者総計一、九二九名(死去：七六名、不明者：二八名を含む)

(2) 年次別会費納入者数(別表1)

(3) 年度別納入額および人数(別表2)

別表1　年次別会員数と会費納入結果(7月1日現在)

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
17	1	0	1(0)	42	54	0	54(42)	69	76	6	82(33)
18	2	0	2(2)	43	67	0	67(50)	70	80	7	87(33)
19	1	0	1(1)	44	68	0	68(37)	71	54	10	64(18)
20	1	0	1(1)	45	63	0	63(44)	72	50	11	61(19)
21	8	0	8(4)	46	81	0	81(59)	73	41	10	51(17)
22	5	0	5(5)	47	84	0	84(57)	74	65	12	77(22)
23	8	0	8(8)	48	84	1	85(50)	75	38	7	45(13)
24	3	1	4(2)	49	126	4	130(65)	76	28	7	35(10)
25	12	0	12(6)	50	104	3	107(58)	77	41	9	50(19)
26	11	1	12(4)	51	120	1	121(62)	78	28	13	41(12)
27	13	0	13(9)	52	130	2	132(80)	79	29	14	43(13)
28	28	0	28(18)	55	36	0	36(21)	80	16	7	23(8)
29	15	0	15(8)	56	124	3	127(77)	81	21	9	30(6)
30	20	0	20(17)	57	126	3	129(68)	82	14	5	19(4)
31	27	0	27(14)	58	117	3	120(63)	83	61	17	78(18)
32	33	1	34(22)	59	109	5	114(50)	84	8	1	9(4)
33	31	0	31(19)	60	116	2	118(59)	85	25	4	29(10)
34	32	1	33(20)	61	92	6	98(44)	86	2	0	2(0)
35	36	0	36(28)	62	94	3	97(39)	87	1	0	1(0)
36	38	2	40(26)	63	99	7	106(47)	88	2	0	2(1)
37	27	1	28(21)	64	76	1	77(38)	89	2	2	4(0)
38	46	0	46(33)	65	71	2	73(28)	92	1	0	1(0)
39	41	1	42(26)	66	81	8	89(30)				
40	41	0	41(30)	67	67	7	74(25)				
41	65	0	65(49)	68	74	12	86(26)	計	3491(232)		(1853)

注)　①　(　)内は前会計期会費納入者の人数(住所不明者28名を含む)
　　この他76名が会費納入後死去
　　②　不明者は以前東京支部に登録されていて現在所在不明のもの
　　③　前会計期(1987.4～1992.3)は本年3月で終了

別表2　年度別納入額および納入者数

納入額総計(1987.1.～1992.3.)			5,993,670円	
内訳	～1987年4月	小計	70,000円	(7名)
	1987年4月～	小計	3,378,200円	(1,111名)
	1988年4月～	小計	342,000円	(110名)
	1989年4月～	小計	43,600円	(9名)
	1990年4月～	小計	1,247,285円	(435名)
	1991年4月～	小計	912,585円	(170名)

訃報

謹んで衰悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏名	年次	逝去年月日
矢島弥太郎	(19回)	1985.12. 1
鎌倉　力	(67回)	1986. 9.18
富平　敍夫	(31回)	1987.12.28
矢崎　光雄	(52回)	1988. 6.11
矢崎　敏	(38回)	1988. 7.17
新村大三郎	(28回)	1989. 7.13
見学　三景	(24回)	1989. 8.22
塚原　達三	(43回)	1990. 3.28
花岡　真澄	(13回)	1990.11.16
薄井　信男	(40回)	1990.12.13
宮坂　宗次	(39回)	1991. 3.24
神山　豊	(58回)	1991. 4.10
今井　宏	(33回)	1991. 5.27
宮坂　文雄	(28回)	1991. 6. 1
宮下　庄司	(43回)	1991. 7.12
堀内　信吾	(51回)	1991. 8.23
浜　信義	(66回)	1991. 8.
矢崎　高儀	(17回)	1991. 9.19
太田　捲治	(30回)	1991. 9.20
北原　造次	(29回)	1991.10.13
藤森　宗吉	(23回)	1991.10.16
横内義一郎	(28回)	1991.10.17
白川今朝晴	(22回)	1991.10.20
野崎　重男	(21回)	1991.10.30
両角　平吉	(32回)	1991.11.14
三沢　邦男	(34回)	1991.11.17
大塚　春彦	(44回)	1991.11.20
河西　邦孝	(28回)	1991.12.16
小池　諒	(32回)	1992. 1. 2
浜　雅雄	(37回)	1992. 1. 5
浜　幹雄	(37回)	1992. 1.10
宮坂　望	(58回)	1992. 1.19
林　武男	(46回)	1992. 1.25
青木　七郎	(33回)	1992. 1.31
内藤　喜作	(27回)	1992. 2. 2
三村　泰	(37回)	1992. 2. 2
上条　達雄	(34回)	1992. 2. 7
立石　茂人	(33回)	1992. 2.13
伊藤　荒男	(29回)	1992. 2.14
後町　富弘	(39回)	1992. 2.18
丸山　隆	(43回)	1992. 2.21
山田　大	(20回)	1992. 3.15
橋爪　信彦	(42回)	1992. 3.16
川上　秀雄	(23回)	1992. 4.16
今井　博朗	(27回)	1992. 4.29
矢島　脩造	(42回)	1992. 5.29
清水　千福	(56回)	1992. 6.15
吉田　正美	(34回)	1992. 7.12

(事務局に連絡の入った方々です)